

雨天日放課後(2013年春:13~15人)の屋内の児童分布と遊びの形態
 - 規模計画の観点から見た2室3領域型学童保育施設の使われ方その3 -

学童保育施設
地域塾

納屋
使われ方

改修
空間機能評価

準会員 ○大和聡羅*
 正会員 後谷一機**
 正会員 草野啓太**
 正会員 中園真人***
 正会員 山本幸子****

晴天日放課後(2013 秋:15~20 人)の屋内・屋外の児童分布と遊びの形態 - 規模計画の観点から見た 2 室 3 領域型学童保育施設の使われ方 その 2- に続き、2013 年春の放課後の報告を行う。

1. 放課後の生活プログラム(2013年春)

1) 調査期間中の生活プログラムの基本構成

本稿では、2013 年春の事例を取り上げる。2013 年 6 月 10 日~7 月 16 日の間の平日放課後 8 日を対象に使われ方調査を実施した。調査期間中の児童数(学年毎)とタイムスケジュールを表 1 に示す。雨天日の放課後平日保育の実施状況を把握する事を目的に実施した調査であり、調査期間中雨天日は 5 日間であった。雨天日との差異を把握するために晴天日においても合わせて 3 日間実施した。

雨天日には、施設職員の指導によりグラウンド・庭広場等の使用が制限され、自由遊び時間内における児童の遊び場所が実質的に室内(多目的室・プレイルーム)に制限される。晴天日の平日放課後における児童の過ごし方の典型的な例としては、本論その 1・その 2 で例に挙げたが、雨天日においても基本的に同様で、おやつ・勉強のプログラムを経た後、自由遊びが行われる。生活プログラムが、来所・おやつ・勉強・自由遊び・帰宅と推移する中で、来所時間・勉強に要する時間は児童・学年により異なるため、勉強後の自由遊びに移る時間は児童毎に差がある。そのため勉強と遊びが室内で混同する状況が生まれる事があるが、詳しい内容については 2 章以降で説明する。

2011 年秋(本論その 1 稿)の保育状況では同じ雨天の状況となった場合であっても、自由遊び時間中の在室児童数は 10 名程度である。2013 年春における保育状況では人数規模が拡大し放課後の来所児童数は調査期間中で最大 19 名となる。そのため雨天時の自由遊び時間中の在室児童数は、2011 年 秋放課後と比べると 1.5~2 倍の人数規模となる。

2 室 3 領域の領域構成を持つ同施設において、人数規模が変化した場合の領域毎の使われ方の状況と、児童の勉強の場・遊び(静的遊び・動的遊び)の場と生活プログラムの展開において検討し、学童保育施設における生活プログラムと施設空間構成のあり方について考察する。

2) 典型日の児童推移と自由遊び時間

調査期間中の来所児童数推移と、遊びの継続時間と移動回数の計測結果を図 1, 2 に示す。全調査日程の中から、

3 日分程(6/19, 6/20, 7/4) 典型日を抽出し時間の計測を行っている。期間中の来所児童は 3 年生が 1~2 名、2 年生が 1~2 名、残りが 1 年生で合計は 14~15 名程度であったが、2・3 年生の来所時間が 1 年生と異なる場合があった。図 1 中、6/20・7/4 日については高学年が 16:20~30 頃に来所した。日ごとに多少の差はあるものの、来所~17:00 の遊びの継続時間は比較的長く、21.6~29.2 と、最長で 30 分近い値を示している。遊び間の移動回数については日ごとにばらつきがあった。

2. 生活プログラムの展開と空間の使われ方

図 3、4 より生活プログラムの展開に沿って使われ方の詳細を考察してゆく。学年によって下校時間が異なるが、概ね 15:20~15:50 の間には来所する。児童が来所する前に職員は多目的室の収納から机を取り出し、プレイルー

表 1 放課後の生活プログラム(2013年春)

日付(曜日)	天候	来所人数			合計	職員
		3-M/F	2-M/F	1-M/F		
6/10(月)	晴	2/0	0/1	9/6	18	3
6/19(水)	雨	2/0	0/2	6/4	14	3
6/20(木)	雨	2/0	0/1	8/4	15	3
6/21(金)	雨	2/0	0/1	6/4	13	3
7/03(水)	雨	1/0	0/2	6/4	13	3
7/04(木)	雨	2/0	0/1	7/5	15	3
7/11(金)	晴	2/0	0/2	6/5	15	3
7/16(火)	晴	2/0	0/2	9/6	19	3

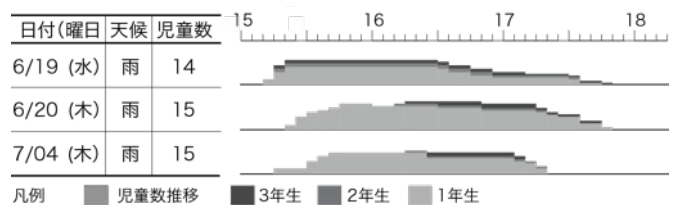


図 1 1日ごとの来所児童数の推移(2013春)

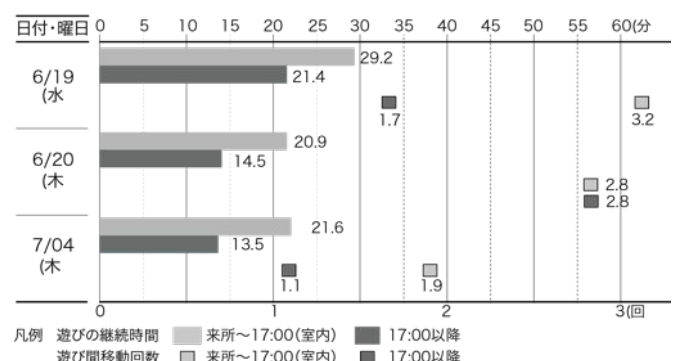


図 2 遊びにおける継続時間と移動回数(2013春)

ムに2脚、多目的室では机間を十分に空け数脚を配置し、おやつと勉強の用意を行う。児童は来所すると、ロッカーに荷物を置き手洗い場で手を洗い、多目的室でおやつを食べる。このとき服が濡れている児童はロッカー前・トイレ等で着替えを行う。職員は3名在室し、おやつ当面倒を見る・勉強の様子を見る・来所した児童の出迎えといった役割分担がなされており、児童を出迎える職員は雨天日には雨を拭いてやり着替える児童には手伝いを行う事もある。手洗い・着替え等、準備を整えた児童からプレイルームでおやつを食べる、職員はプレイルームでおやつを手渡す(図面3-a)。おやつを食べ終わった児童から、多目的室で勉強を行う(図面3-b、写真3-a)。

15:40以降、勉強を終えた児童が現れ始めるが、プレイ

ルームでおやつを食べている児童の周りで自由遊びを始め、おやつと自由遊びが混合された状態になる。来所時間の遅い高学年を除いた全員が来所しおやつを食べ終わると、職員がプレイルームの机を片付ける(図面3-c)。プレイルームの机が無くなると、ボール遊びなど室全体を使った遊びが行われるようになる(図面3-d)。多目的室ではまだ勉強をしている児童がおり遊びの場としては機能しないため、プレイルームではボール遊び等の動的遊びと読書等の静的遊びが混合して行われる。静的遊びはこの時、動的遊びの行われない畳コーナーやプレイルームの端で行われている(図面3-e、写真3-c)。又、プレイルームで自由遊びを行う児童数が増加し多目的室も使用出来ない状態になると、児童が軒下で遊び始める。軒

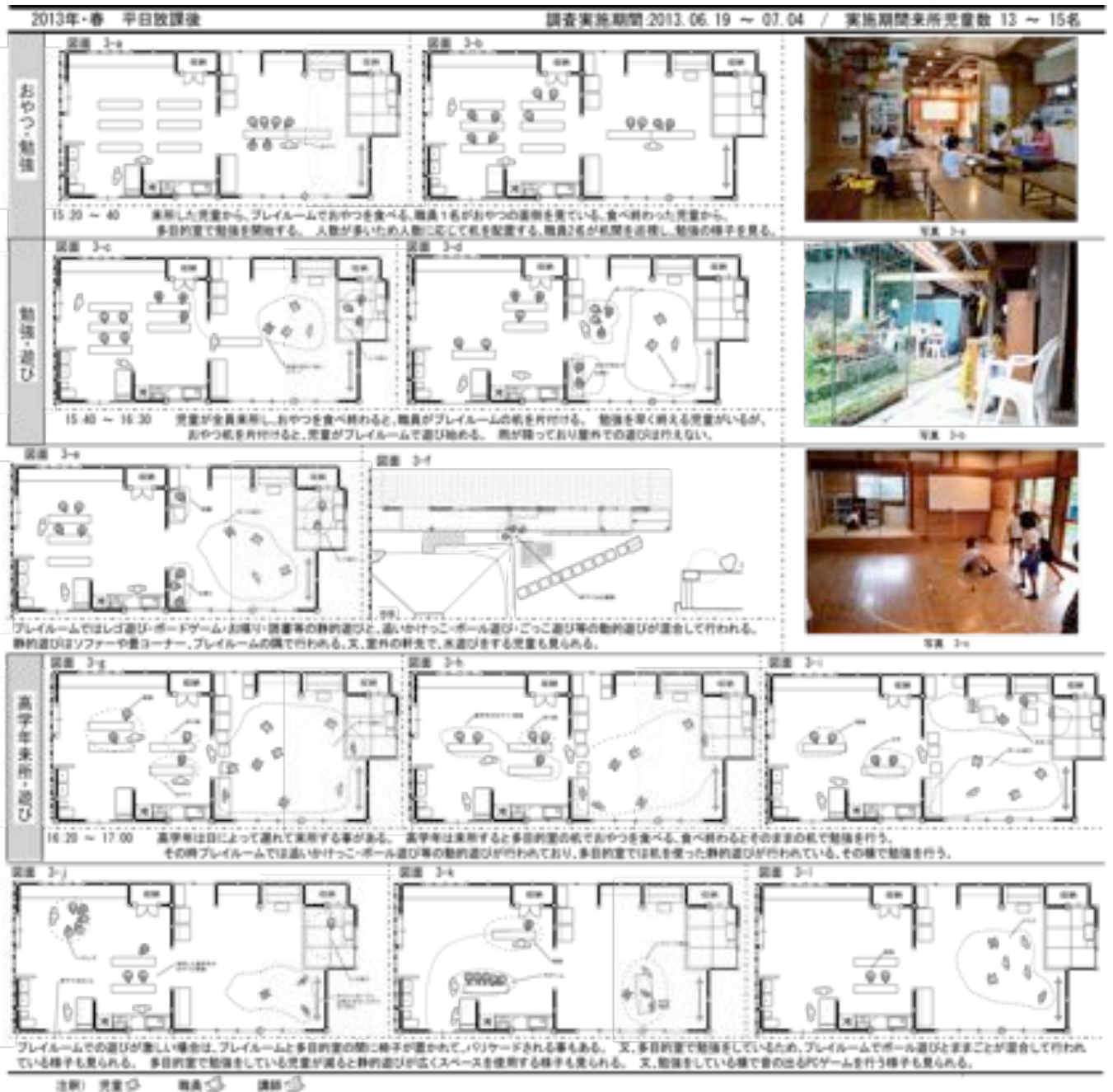


図3 2013年春における放課後の様子の典型場面(その1)

は納屋の改修⁷⁾に伴い母屋との接続部分として既存のものが残されており、伝統民家改修型学童保育施設ならではの使用され方と言える。軒下で行われる遊びは静的遊びで、雨水を利用したままごと・かえるの観察といった雨天時特有の遊びが行われている(図面 3-f、写真 3-b)。

高学年は日によって下校が遅い場合があり、16:20以降に来所する日があった。来所すると多目的室に置かれた机でおやつを食べ(図面 3-g)、食べ終わるとそのまま同じ机で勉強を行う(図面 3-h、写真 4-a)。2,3年生についても互いに下校時間が異なる。また、高学年が下校して来る時には大半の児童は勉強を終えており、多目的室

では机を使った折り紙などの静的遊びが行われている。これら下校のタイミング・高学年来所時の多目的室の様子によって、同時におやつ・勉強・自由遊びといった性質の異なる行為が行われる時間帯がある(写真 4-b)。

プレイルームでの遊びが激しい場合はプレイルームと多目的室の間に椅子が並べられ簡易な柵が作られる場合がある(図面 3-i)。この時、プレイルーム内では主にボール遊び等の激しい動的遊びが行われ、ままごとなどの静的遊びが同領域内に混在する場合がある(写真 4-c,d)。簡易な柵は多目的室へプレイルームからの動的遊びが侵入しないために用いられるがそれでも多目的室にまで動的



図 4 2013 年春における放課後の様子の典型場面(その 2)

遊びが侵入するため、柵付近で静的遊び・勉強を行っている児童は多々そちらに気を取られている（写真 4-e）。多目的室内でも音の出る PC ゲーム・広くスペースを使用する、といった静的遊びも行われており勉強を行うには厳しい環境であり、職員は勉強を考慮し静的遊びの行われる場所を様々に模索している様であった（図面 3-j,k）。プレイルームでの動的遊びが同領域内の大半を占めておりかつ多目的室で勉強が行われている場合、軒下へ遊びの場を移動するシーンが見られた（図面 3-l, 図面 4-a、写真 4-f）。遊びの種類によって参加児童数も多いが、6 名程の児童がいる場合にも広さに余裕をもって遊びを行う事が出来ている（図面 4-b、写真 4-g）。

17:00 以降は晴天日同様に、室外での遊びは制限されるため軒下で遊んでいた児童は時間になると遊びをやめて室内へと戻る。室内へ戻ると、多目的室やプレイルームでも続けられる遊びを行っていた児童は、そのまま同じ遊びを続ける。ままごとを軒先で行っていた児童は引き続きプレイルームで同じ遊びを継続して行うシーンが見られたが、広いスペースを使用した動的遊びが行われている場合もあるためままごとは隅や畳コーナーで続けられる（図面 4-c）。学童保育施設には珍しく PC を使ったゲームを児童に許可している様子も見られた。Web に繋がった PC のため職員の監視が常に必要と思われるが、つばめの家では静的遊びの場は多目的室を基本としているため、事務机で作業をしている職員が同時に様子を見守っている（図面 4-d、写真 4-h）。ただし前述の通り音の出る遊びのため、勉強を行っている児童が同僚域内にいる場合には工夫が必要と思われる。17:00 以降は保護者の迎えが頻繁に来所する時間帯で、17:30 頃には大半の児童は帰宅している（図面 4-e）。プレイルームにおいて静的・動的遊びといった性質の事なる遊びが同時に行われる場合にも、人数が減ると場の広さにも猶予が出来ているため、遊びの進行に影響は見られなかった（図面 4-f）。また極端に児童人数が帰宅により減少すると、多目的室・プレイルームの 2 室を使用して追いかっこ等の動的遊びを行うシーンも見られる。児童人数が帰宅により減少し、かつ 1 種類の遊びを在室している児童全員で行っているため、この場合は職員も児童を注意する等は行わないため広いスペースでのびのび遊んでいる（図面 4-g）。また、同様の状況でも他の遊びを行っている児童が在室している場合もあるが、図面 4-h に見られる様に畳コーナーでレゴ遊びを行う・プレイルームの隅を使用してままごとを行うといった際に、他の児童の迷惑にはならない範囲で多目的室を動的遊びの場としても使用していた。

3. まとめ

平日放課後について、1~3 稿のまとめを行う。2011~13 年にかけて同施設内では 1.5~2 倍近い来所児童数の増加が見られた。来所児童数 20 名の場合、児童 1 人あたり

のスペースは 2.81 m²となり、厚生省の定める基準値 1.65 m²と比べると大幅に基準を満たしている。しかし、基準値自体は十分な広さとは言えず、2013 春に見られる様に同一領域内で行われる活動によっては、軒下へ遊びの場を移す等といった逃げの場の必要が出て来る場合もある。そのため屋内規模と児童辺り広さの関係は今後の研究課題として更に考察する。また、2011・13 秋の晴天日における調査から、室内広さの確保と同様に屋外使用の可・不可についても重要な計画項目として施設設置段階で検討されるべきであると考えた。つばめの家は屋外空間が充実しており、晴天日においては集団規模の拡大にも充分に対応出来ていた。雨天日の報告に見られる様に屋外空間の使用が不可能な場合もあるため、室内空間の領域構成についても同様に、施設計画の重要課題に位置づけられると考える。平日放課後の 3 時間の間にも、おやつ・勉強・遊び（静・動的）と児童の活動は多様である。活動が円滑に行われるためには、同一空間内に性質の異なる活動が混在する状況は避けるべきだと考える。その点で、つばめの家は 2 室 3 領域を成しており逃げの空間の確保・領域区分が活動円滑に進行させている。高学年の来所時間の差から勉強と他の活動が同一領域に混在しているシーンが見られたが、職員の指導が行き届いており、活動毎に排他し合う状況が避けられていた。円滑な活動を維持するためには、保育体制と指導の努力によるところが大きく、施設規模に合わせた運営方法の検討についても今後の考察課題に加えたい。

参考文献

- 1) 斎尾直子・長谷夏哉:都市における児童の居場所づくりの多様化と安全安心-豊かな空間確保両立についての考察,日本建築学会計画系論文集, No.614,pp,33-39,2007,4
- 2) 宮本文人・岩渕千恵子:学童保育施設における活動機能と平面構成,日本建築学会計画系論文集, No.618,pp,25-31,2007,8
- 3) 清水肇・小野尋子:学童保育施設の生活空間構成の実態,日本建築学会計画系論文集, No.668,pp,1799-1806,2011,10
- 4) 塚田由佳里・小伊藤亜希子:施設空間と保育方法からみた学童保育所の分割方法とその効果,日本建築学会技術報告集,第 27 号,pp,223-228,2008,6
- 5) 松本歩子・山根さおり・関川千尋:近年の学童保育所のあり方に関する研究,日本建築学会計画系論文集, No.630, pp.1683-1690,2008,8
- 6) 三宅勝司・高橋博久:民家型学童保育施設の空間構成に関する調査研究,日本建築士学会大会学術講演梗概集,E-1 分冊,pp,59-60,1997,9
- 7) 後谷一機・中園真人他 2 名:地域人材を活用した夏休み地域塾の取り組み,日本建築学会中国支部研究報告集,第 34 巻,pp.565-568,2012.3

* 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生

** 山口大学大学院理工学研究科 修士課程

*** 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

**** 筑波大学システム情報系 助教・博士(工学)

Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

** Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

*** Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng

**** Assistants Prof., Faculty of Eng., Information and Systems., University of Tsukuba., Dr.Eng.